

V・マテジウスの英文学研究

—そのシェイクスピア論を中心として—

飯 島 周

ヴィレーム・マテジウス (Vilém Mathesius 1882-1945) は、周知の如く、言語学史上重要なプラハ学派の創設者のひとりである。いわゆる機能言語学を提唱し、一般言語学の理論的指導者として活躍、数多くの優秀な研究者を育てた。その独創的な言語分析の方法は、今日の言語学界でも注目され、内外の諸研究に影響を与えている。マテジウスが、その主要な著作のほとんどをチェコ語で発表しているにもかかわらず、国際的に重要視されているのは、主としてこの分野での業績による。

しかし、マテジウスは、本来、チェコにおける組織的なイギリス学 (anglistika) の確立に貢献したことで知られ、国内での地位の基盤は、その点にある。すなわち、東ボヘミアのパルドゥビツェ (Pardubice) で、手袋製造業者を父として生れたマテジウスは、生来の才能と努力によって、1909年には、プラハの大学における英語・英文学関係の講座の担当者となり、3年後には、チェコ人として初めてこの分野の教授に任命された。これは、名目的には独立した王国だったが、事実上はオーストリア・ハンガリア帝国の属領だった当時のチェコでは、文字通り特例であった。マテジウスが、その地位を確保した後、英語とチェコ語の組織的具体的な対照比較を手がかりにして、言語に関する一般的原理を追求したことは特に有名である。

マテジウスが没してからすでに38年になるが、昨1982年は、その生誕100年に当る。この記念として、プラハのオデオン社から出版されたのが論文集『言語・文化および文学』 (*Jazyk, kultura a slovesnost*) 1982である。ただし、実際の発刊は1983年になってからで、同年5月19日付『朝日新聞』夕刊の海外文化欄で我が国に初紹介された。ついでながら、そ

れと前後して、芸術学で有名なムカジョフスキー (Jan Mukařovský 1891-1975) の主要論文集『詩学研究』(*Studie z poetiky*) 1982が、同じくオデオン社から出され、マテジウスのもとと並んで、プラハ学派の古典期の重要な部分を代表する論文が、まとまった形で読めるようになった。

ムカジョフスキーの論文集は900ページを越す大冊であるが、マテジウスの論文集も総計529ページあり、小さなものではない。内容的には、言語学、文学、文化論の各部の他、個人的回想を中心とした部を独立させ、合計4部を主体としている。これに加えて、愛弟子ヴァヘク (Josef Vachek 1909-) の解説、索引、マツェク (Emanuel Macek) 編によるマテジウスの著作目録があり、この大学者の全体像をとらえるような努力がなされている。

この論文集を一見して感ずるのは、マテジウスの仕事の多面性である。すなわち、その学問の基本点を示す「言語現象の潜在性について」(*Opotenciálnosti jevů jazykových*) 1911のように、統計的方法も利用した高度に専門的な言語学の論文から、一般教養向けのすぐれた解説「言葉と文体」(*Řeč a sloh*) 1942、および「思想家としての H. G. ウェルズ」(*H. G. Wells jako myslitel*) 1922に見られる作家論、さらに「文化的スノビズム」(*Kulturní snobismus*) 1945などの文化的社会批評に至るまで、その主題は非常に広範囲に及んでいる。時には具体的な問題についての提言もなされ、たとえば「思い出」(*Z mých pamětí*) 1936のギムナジウムの部には、中等学校での教員のこまぎれ的な授業担当の改善法などがあり、教授法の問題も含めて、教育者としての洞察の深さを示す。マテジウスは、英語教育の普及にも関係し、ラジオの英語講座を担当したこともあり、本論文集には採録されていないが、『英語をこわがるな』(*Nebojte se angličtiny*) 1936というテキストさえ出している。このような多面性は、ムカジョフスキーの論文集が、マテジウスに関するふたつの文章 (マテジウスの50才記念の文、およびマテジウスの追悼文) を除いては、ほとんど専門の学術論文ばかりであるのと対照的である。

前述の著作目録によれば、一部再録などによる重複も含んで、1906年から没年1945年までの著作件数は366であり、第2次世界大戦後の苦難を忍ばせる、1949年から1959年まで全く空白の11年間を挟み、死後の出版や翻訳まで合計すると389に達する。偶然ながら、389番目、つまり最後のものは、遺著『一般言語学に基づく現代英語の機能的分析』(*Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecně lingvistickém*) 1961の日本語版である『機能言語学』桐原書店1981になっている。なお、この本の序にある「ヴィレーム・マテジウスの生ける遺産」はヴァヘク教授によるマテジウスの現代的意義の解説で、参考になる点が多い。

上記のこの膨大な著作の中から、特に英文学関係の研究を拾ってみると、これも多彩であることがわかる。その対象は、英雄詩『ベオウルフ』(*Beowulf* 8世紀前半?)から、ウィクリフ(John Wycliffe 1329-84)、チョーサー(Geoffrey Chaucer 1340?-1400)、マロリー(Sir Thomas Malory 1410?-71)、デフォー(Daniel Defoe 1660?-1731)、フィールディング(Henry Fielding 1707-54)、シェリー(Percy Bysshe Shelley 1792-1822)、ディケンズ(Charles Dickens 1812-70)、コンラッド(Joseph Conrad 1857-1924)、ゴールズワージー(John Galsworthy 1867-1933)、そしてショー(George Bernard Shaw 1856-1950)に至るまで、英文学史の全域に及んでいる。実際、マテジウスは、英文学の通史を書くことを計画し、『主要な流れと代表的作家による英文学史』(*Dějiny literatury anglické v hlavních jejích proudech a představitelích*)を、第1部(1910)、第2部(1915)と発表した。第2部はルネッサンスの前で終わっているが、ヴァヘクの解説によれば、眼病のため仕事を制限され、この方面のことは遂に断念せざるを得なかったのである。その後半生における病気との苦闘は、ヴァヘクの解説の中で印象深く述べられ、感動を誘う。実際に、1933年には、大学での講義をまとめた、18世紀頃までの英文学史が出されているから、少しでもこの仕事の完成に近づくよう、努力を怠らなかつたことが推察できる。マテジウスのこのような研究への熱意は、数多くの書評や紹介記事にも見られ、たとえば、「日本における

イギリス学」(Anglistika v Japonsku) 1936とか「日本におけるシェイクスピア」(Shakespeare v Japonsku) 1937という題の小記事類さえ、前記の目録に含まれている。

この多種多彩の英文学関係の著作中、数量的にも内容的にも、特に目立つのはシェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) を対象にしたもので、直接関係する分だけでも30近くなる。そこで、この機会に、マテジウスの英文学研究の具体例を、特にシェイクスピアについての代表的著作を中心に、すこし検討してみたい。

まず注目されるのは『ウィリアム・シェイクスピア』(William Shakespeare) 1916である。これは、いわゆる教養文庫的な小冊子で、わずか47ページであるが、内容は3部にわかれ、それぞれ、その生涯、作品、劇作家としての評価を中心に論じており、マテジウスのシェイクスピアに対する基本的態度が読み取れる。

第1部、つまりシェイクスピアの生涯の記述については、他のほとんどの伝記と同じである。すなわち、地方の商業都市ストラットフォード (Stratford upon Avon) の役人の子として生長したシェイクスピアが、幼時にラテン語を含む教育を受け、わずか18才の時8才年長の女性と結婚し、やがて大都会ロンドンへ出て芝居の道に入り、劇作家として大成功を納めて引退し、安らかな老後を故郷で送ったと記され、特別な発見はない。ただ、多くの伝記にある、父親のジョンがストラットフォードの bailiff つまり mayor の職にあったという記述は、この町が独立権を持っていなかったのだから誤りだと指摘している。同じような管理職であるにしても、mayor と bailiff が質的に異なる存在なのは確かであろう。

作品の解説も、ほぼ定説に従い、全体を、悲劇、喜劇、歴史劇の3種に分類し、シェイクスピアが原資料を巧みに処理して、それぞれの主要登場人物をしばり込む手法を興味深く分析し、それぞれの種類の代表例を示している。すなわち、悲劇では『リア王』(King Lear) におけるリア王とその娘コーディリアの性格創造を詳説し、数では悲劇の倍にも達

する喜劇では『まちがいの喜劇』(*The Comedy of Errors*)と『あらし』(*The Tempest*)を対照的な作劇法だと述べ、歴史劇ではシェイクスピアの独自性が最もよく発揮されていることを指摘して『リチャード3世』(*Richard III*)に言及し、さらに『ヘンリー4世』(*Henry IV*)と『ヘンリー5世』(*Henry V*)を比較して、前者における性格発展の描写と内面的演劇性を、後者での華やかな演劇的技術性と対比する。又、上述の作品のそれぞれのタイプが、シェイクスピアの発展の時期を代表するとし、『まちがいの喜劇』が第1期(1590~1から1593~4)、『ヘンリー4世』と『ヘンリー5世』が第2期(1594~5から1601)、『リア王』が第3期、つまり大悲劇の時期、そして『あらし』が最後の第4期(1610から1612)で、特に『あらし』では、悲劇的な運命がやがて静かな幸福に終り、まさに嵐の後の太陽の美しさが描かれている、とする。これらを総合したマテジウスの見解では、シェイクスピアは共通一定の理論的思考に基いて作品を書いたのではなく、それぞれの資料の性格に応じて、個々の芝居を臨機応変に作りあげた。そしてそのために、それぞれの作品が、演劇の花が一面に乱れ咲いていたエリザベス朝において、独自の香りと色を誇ることができたのである。

最後の部は、劇作家としてのシェイクスピアの評価で、ここにはマテジウスのみごとな分析法が示されている。まず、この多種多様な作品を書いたシェイクスピアについて、全体的に要約することは困難で、評価者の人柄によってさまざまであり、しばしば反対の意見があることを前提とする。ただ、最小の合意事項となし得るのは、シェイクスピアの詩人としての天才、“言葉の巨匠”としての評価であることを確認し、それを出発点として考察を進める。そして、初期の作品で多用される blank verse から、詩による音楽性と散文の喜劇的効果に至るまで、思考や情緒の多彩さを表現するための言語的手段の巧みさが最初に述べられている。次に、詩人シェイクスピアが、又劇作家としてどうだったかを問題にし、ヴォルテール(Voltaire 1694—1778)の言葉を引用してシェイクスピアの永遠性を賞讃し、作品構成の精巧さの例として『夏の夜の夢』

(*A Midsummer Night's Dream*) をあげ、この劇の中では4つの話の流れが錯綜しながら、相互にぶつかり合わずに、しかも全体が夢のように楽しく軽やかに進行する、と評している。——ところで、この作品の題名の訳に、マテジウスは「聖ヨハネ祭の夜の夢」(Sen noci svatojanské) を用いている。元来、Midsummer Night とは St. John's Night、つまり6月24日、夏至の頃であるのに、劇中の事件の時は Maytime になっている点が、しばしば問題にされる。しかも劇の内容は、妖精や各種の霊が活躍すると言い伝えられている聖ヨハネ祭の夜と密接に関係しているのだから、一層説明がむずかしい。参考のため、仏・独・露各国での訳を調べると、独訳の一部に「ワルプルギスの夜(Walpurgisnacht)の夢」が用いられている位で、他はすべて「夏の夜の夢」という日本語訳と一致する。日本では「真夏の夜の夢」という訳も有名であるが、マテジウスがあえて「聖ヨハネ祭の夜の夢」としたのは、原題と内容を尊重したのかも知れない。実際に、原題の意味を「聖ヨハネ祭の夜にふさわしい夢」と解釈しても、それほど不自然ではあるまい。少なくとも、不特定の感がある「夏の夜」ではなく、特定の「夏祭の夜」とでもしたいような気がする。

ついでながら、ここで一寸翻訳の問題に触れておきたい。マテジウス自身は、H.G. ウェルズの短篇と『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)の一部を除いて、ほとんどまとまった翻訳をしていないが、諸論文に散見される各種の訳文は、いずれも文体的に工夫されたものと思われる。外国文学、より正確には外国語による文学を研究する場合には、翻訳の問題を避けるわけにはいかず、各人が基本的態度を明確にする必要があるであろう。マテジウスの基本的態度は「チェコの翻訳における諸問題について」(O problémech českého překladatelství) 1913に示されているが、根本的な要旨を述べれば、“翻訳と原文の対比は、芸術性の点でなされるべきで、単なる語学的に正確な引きうつしであってはならない”ということである。これは極めて常識的な考えかも知れない。ただ、実際問題となると戸惑うのではないだろうか。たとえば、シェイク

スピアの日本語訳は数多く、それぞれ特徴があり、『蜘蛛の巣城』式の翻案は別として、原文のひとつひとつに対する訳者の苦心が忍ばれる。しかし、時には思い切った訳があってもよいような気がする。思いつくままに例をあげれば、あまりにも有名なハムレットの独白、To be, or not to be : that is the question. を「いったいどっちだろう、わかんないなあ」位で表現することも可能であろう。もちろん、全体的な性格づけによるが、優柔不断で現代的なハムレット王子を強調したいなら、それなりの効果はありそうである。あるいは、ロメオの友人マーキューショウの末期のせりふ……ask for me to-morrow and you shall find me a grave man. がある。この後半の部分については、たとえば中野好夫氏の訳「あわれ、はかなや、お墓入りってやつよ」などがあり、grave という単語による pun が重要視されている。筆者は、ある初級の注解書で「はかまじめ」という語を提案したことがあるが、もっと進めて、「あした来てみろ、おれはおしゃか様になってるからな」などと訳するのは乱暴すぎるだろうか。Pity's akin to love. を「可哀想だた惚れたって事よ」と訳した『三四郎』中の登場人物佐々木与次郎は、「偉大なる暗闇」こと広田先生に「愚劣の極だ」とやられたが、マテジウスだったら、案外感心したかも知れない。――

本筋に戻って話を進めると、マテジウスは、シェイクスピアの作品には非常にすぐれたものが圧倒的に多いことを認めているが、すべての作品が芸術的に問題ないわけではないとしている。たとえば『マクベス』(Macbeth)の最後の場面とか『アントニーとクレオパトラ』(Antony and Cleopatra)の4幕目は失敗であるとの批判も下している。しかし最終的には、その友人だったベン・ジョンソン (Ben Jonson 1572-1637) と異なり、シェイクスピアは、古典劇の束縛を完全に脱して、独自の芸術的思考に従って作品を作り出したという高い評価を与えている。

劇作家としての評価の一部として最後に論じられているのは“人生の哲学者”シェイクスピアである。この点についてのマテジウスによる評価は否定的で、シェイクスピアにはそれほど高い哲学性が認められない

と断言している。そのひとつの証拠としてあげられているのは、シェイクスピアの描いた悲劇が、普遍的な運命のきびしさから生ずるものではなく、いわば偶発的な行為から起る、全く個別的な運命の悲劇に過ぎないことである。つまり、勇者や貴族や王族が、ふとした心の迷いのために落ち込む事件を、巧みに脚色しただけだという判断であろう。マテジウスは、この問題を、別の論文「哲学者シェイクスピアについての論争に寄せて」(Ke sporu o Shakespeara filozofa) 1916で独立的に論じ、シェイクスピアを哲学者と見る何人かの意見に対し、詳細な例をあげて反論している。この意見は、おそらく、シェイクスピアを、かの Merry Old England と密接に結びつけて考える多くの人たちの共感を呼ぶであろう。たとえば、中野好夫氏の著書『シェイクスピアの面白さ』新潮社 1967には、シェイクスピアを大学者と見ることの愚かしさが指摘されている。——中野氏は、自らをシェイクスピアの素人読者だとしているが、この本には、シェイクスピアそのものよりも「シェイクスピア論の面白さ」を論じているような部分がある。中野氏よりも、ずっと素直な意味での素人読者である筆者には、それがこの本の面白さだとさえ感じられるのだが——いずれにせよ、マテジウスはその論文の最後に次のような趣旨を述べている：“シェイクスピアを大哲学者に仕立てようという試みは、ただ、ありもしなかったことを作りあげるばかりでなく、現実を実際と異なる価値の上におくことになる。すなわち、他の何よりもまず、シェイクスピアは大詩人であり大芸術家だったのである。” もちろん、この趣旨は、『ウィリアム・シェイクスピア』での主張と変わらない。そして、同書はこの大詩人の精神が、生涯故郷のストラットフォードに根をおろしていたことも強調している。

以上が主要な著書の概要であるが、もうひとつシェイクスピア関係の重要な論文として「テーヌのシェイクスピア批評」(Tainova kritika Shakespeara) 1907がある。これには「文学史の科学的研究の試みの歴史のために」という意味の副題があり、3部にわけて発表された。この主題は、有名な『英文学史』(*Histoire de la littérature anglaise*) 1863—64

の著者テーヌ (Hippolyte Taine 1828—93) のシェイクスピアに対する評価とその発展を、組織的に追跡し分析したものである。ここでは、直接の資料、特にテーヌの書簡類を綿密に検討し、その生涯の精神生活を4期にわけ、それがシェイクスピアに対する評価とどのように関係し、どのように評価が変化して行ったかを述べて、まさにテーヌ自身の実証的方法と比較し得る態度を見せている。マテジウスは、自身の基本的な学問的思考の根がギムナジウム時代に養われたことを、今回の新論文集で初めて活字化された「わたしの言語学的思考の根本」(Kořeny mého lingvistického myšlení) 1982で述べているが、その組織的科学研究方法を、言語学ばかりでなく、文学および文学史の研究にも適用しようと努力したことが明らかに認められる。

このような各方面からの分析の結果、マテジウスは、最終的に要約すれば、シェイクスピアの言葉の面白さと作品構成の巧みさを賞讃し、それ以上余計なことを言う必要はないとの結論を出している。この評価の裏づけは、もちろん、マテジウスの卓抜な語学力と該博な知識、さらに、非常にすぐれた言語感覚であろう。

上述のようにシェイクスピアに関するものを代表とするマテジウスの英文学研究は、その言語研究に劣らぬ、丹念で正確な方法論を持っている。何よりも印象的なのは、直接作品を組立てている言葉そのものから焦点をずらさずに全体を考察していることである。これこそ、スラヴ語の slovesnost、つまり「言葉の芸術」である文学の研究の原点でなければならない。その意味で、偉大なる言語学者マテジウスは、同時にすぐれた文学研究家でもあったと言えよう。